

秀吉を感動させた牛の働き 大阪築城を誉め、「一日土分しぶん」に

英国には、その肉があまりに美味だったため「サー・ロイン」の称号を贈られた牛がいた。十七世紀初めの、ジェイムズ一世の御代のことで、ロインとは牛の腰のあたりの肉のことをいい、王はそれを「ロイン侯」と称賛したのである。

このエピソードには、いまひとつおまけがあつて、その後、ステーキを二つ切りにしたものを「バロネット」と呼ぶようになったが、サー・ロインにひっかけたしゃれで、バロネット、つまり「准男爵」というわけである。

わが国にも似たような牛の出世物語があり、こちらの主人公は、かの但馬牛。といっても、昨今のように国際的にも有名になるまでは、地方の家畜市などでは「ただしウマウシ」とは何のこっちゃ」といふかる向きも少なくなかったとか。で、話は太閤豊臣秀吉の天下。天正十一年（一五八三）十一月に大阪城の築城工事が始まると、秀吉は、全国三十余か国に号令して各地の牛を徴発（強制的に取り立てること）した。何しろ、本丸、二の丸、三の丸の石垣の長さだけでも三里八丁という空前の大工事であつて、一日あたりの工事人の数だけでも三万人から四万人。竣工間近には十万人に上ることも珍しくなかった。

なかでも難行苦行を極めたのが天文学的量の石運び。当時、この工事を目撃したポルトガルの宣教師フロイスなども、驚きをもって本国にこう書き送ったほどだった。「堺の港ひとつだけでも、毎日二百艘の石を積んだ船が出入りし、我らのいる家からは、時に千艘もの石積み船が見られることもまれではなかった。しかも、その二石さえも、自らの首を失う覚悟がなくては、置き場や数など、片時もゆるがせに出来ないありさまだった」



石は陸揚げされたあと、牛たちによって工事の現場まで運ばれた。それらの石がどれほどの量にのぼったか、いまから想像しても気の遠くなるような話である。この牛たちの働きをつぶさに眺めた秀吉は、さすがに感ずるところあつてか、大阪城が成るや「牛は国の宝、耕作の長たり、春の耕耘こうげんによって、秋の果実を得ることが出来る。牛の功績は測り知ることが出来ない。よつて、牛を庶民の宝となす」と宣言、なかでも但馬牛は役牛として最もすぐれているとして、「一日土分しぶん」を与えたという。いまなら、「一日村長」とか、「一日隊長」とでもいったところだろうが、それにしても、牛たちが「モーけっこう」といわなかったかどうか。